

「ホームにて」では、故郷へと帰る人の姿が描かれています。その一方で、私は歌の主人公とは違う道を選んだ。どんなにうまくいなくても、東京の街で生きていくと決めていたのです。だからこそ、中島さんの励ますような歌声が響きました。私は東京で学生生活を送る中で将棋と出会い、その世界にのめり込んで日本将棋連盟の職員となりました。そして当時の経験を元に書いた『聖の青春』で作家デビューし、今に至ります。あのとき、ジュークボックスで聴いた「ホームにて」は、私の青春そのものです」

作家の岳真也さん(73歳)は、79年に発表された「この空を飛べたら」が思い深いという。「彼女がこの歌を出した当時、私は32歳でした。世界中を放浪してトラベルライターの仕事に明け暮れている時期だった。あの頃、私は前妻と離

婚したこともあり、深い絶望を抱えていました。これからどうやって生きていけばいいのか分からず、途方に暮れていた。その寂しさを埋めるように海外へ行き、インド旅行記などを執筆していたのです。「この空を飛べたら」を聴いたのは、海外滞在から一時的に日本に帰国していたときでした。この歌の主人公は、別れた恋人との記憶を何度も思い返し、過ぎ去った日々を悔悟する。それでも、いつかは空を飛ぶ鳥のように清々と生きたいと願っている。そんなじらしい姿が、岳さん自

綺麗ごとばかりじゃない

「ホームにて」や「この空を飛べたら」は、みゆきがデビューしたばかりの70年代に作られている。さらに彼女は80年代に入っても、名曲を量産し続けた。劇作家で演出家の青木

身と重なった。「私は海外へ飛び立つ飛行機の中で「この空を飛べたら」を口ずさみ、自らを鼓舞していました。長い海外渡航を経てか、私にとっての原点は、海外旅行を繰り返していた30代前半の時期です。当時、何度も聴いていた「この空を飛べたら」は、私にとって大切な歌。加賀乙彦文学賞を受賞した最新作「翔」のタイトルも、ひとつにはこの曲から採っています」

豪さん(54歳)は青春時代に聴いた「友情」(81年)に救われたという。もともと、青木さんがみゆきの存在を知ったのは10歳のときだった。当時の大ヒット曲「わかれうた」(78年)を聴き、そ

の迫力のある歌声と歌詞に夢になった。そして中学に入学してから、「友情」が収録されたアルバム「臨月」を手に入れたという。「小学校時代の僕は不器用で、友達と衝突し、クラスでも完全に孤立していました。中学になって新しく友達が出来ても「また裏切られるんじゃないか」と、疑心暗鬼になっていました。そんな中、聴いたのが、「友情」でした。

この曲で、中島さんは「友情なんて美しいものばかりじゃない。そこには人が傷つけ合う負の感情だって潜んでいるんだ」と歌います。それまで僕が聴いてきた、綺麗ごとばかり並べた歌とは、まるで違った。人間というのは複雑で、一筋縄ではいかない。綺麗ごとでは済まされない場面に直面することだってある。そんな真実を、彼女の歌から学びました。多

面的な人間の姿を描く、それは僕が手掛ける脚本の指針ともなっています」歌は世につれ、世は歌につれ。90年代に入り、40歳を迎えたみゆきは、それまで以上に「世の中」を意識した曲を生み出すようになる。哲学者で宗教学者の、鎌田東二さん(70歳)が語る。「私が衝撃を覚えたのは、「with」という曲です。この歌が出された90年代、日本は激動の時代でした。95年1月17日に阪神・淡路大震災が起きて、そのわずか2ヵ月後に地下鉄サリン事件が起きた。さらに、2年後には酒鬼薔薇聖斗事件までも発生しています。日本社会の根本が揺らぐような災害や事件が起きて、多くの人が不安に晒されていました。私自身も、そのひとりでした」

鎌田さんは未曾有の事態に直面し、哲学者として

て、宗教学者として、自分に何ができるのかと思いを悩んだ。自分の無力さを痛感し、懊悩した。「そんなとき、彼女の歌が心に突き刺さったのです。withは飽きもせず戦争を繰り返す人間の歴史を嘆きながらも、人々の繋がりや尊さを歌い上げています。私たちがひとり生きていくような顔をしているけれど、母もいれば父もいる。必ず誰かと繋がっています。その繋がりを見つめ直し、もう一度、一からスタートすればいい。そんなメッセージが込められています」

私は一連の災害や事件



の後、大事な家族や愛する人を喪い、深い傷を負った方に寄り添うグリーフケアの活動を始めるようになりまし。阪神・淡路大震災に地下鉄サリン事件、そして酒鬼薔薇聖斗事件。withは、激動の90年代を生きた私にとって、道しるべとなつたのです」

内省的な歌を生み出したが、実はこのように「社会派」の一面もある。弁護士で九州大学教授の木佐茂男さん(71歳)も、「彼女は在ベルー日本大使館公邸占拠事件の際に起きた、97年の特殊部隊による突入救済をテーマにした「4.2.3」という曲を書いていて、世の中の動きに敏感で、いつもアンテナを張っている歌手です」と語る。あらゆるジャンルの歌を作ってきたみゆきの中で、とりわけ名曲として

根強い人気を誇る歌がある。92年に発表された「誕

生」だ。(ひとりで私を生かされるけど、でもだれかとならば人生ははるかに違う)――

絶望を支えてくれた

突然のがん発覚に、木山さんは狼狽える。腫瘍の摘出手術をすれば、もう二度と声が出ないかもしれない。一度は歌手を夢見た木山さんにとって、それはあまりに残酷な現実だった。この声が出るうちに、子供たちに肉声を残したい。木山さんは薬にもす

ていた。心の底ではプロの歌手になりたいと願っていたけれど、どうせ無理だと諦めていました。大学卒業後は宙ぶらりんのままアルバイトで食いつなぎ、28歳でリクルートに就職した。その後はサラリーマンとして働き、歌手の夢を誤魔化し生きていました。ところが、3人の子宝にも恵まれた36歳で、人生が一変しました。たまたま受けた人間ドックで、甲状腺がんが見つかったのです」

「人間、いつながりがあるかわからない。それならば悔いなく生きたいと、40歳を前にプロ歌手になるためオーディションを受けました。いま、幸運なことに私は歌手として生きることができています。先の見えない絶望の日々の支えとなつたのが、みゆきさんの「誕生」だったのです。あの曲で、みゆきさんは「わたし、いつでもあなたに言う、生まれてくれて Welcome」と歌ってくれる。「誕生」を聴くたびに、決して順風満帆ではなかった自分の来し方を思い出す。そして、そんな人生をまるごと受け入れてくれる彼女の優しさに触れ、生きる勇気をもらえるのです」

古希を目前に控えた今でも、彼女は新たな歌を生み出し続けている。あなたにとっての「中島みゆき、人生の一曲」はなんだろうか。

【誕生】(P157) ©1992 by Yamaha Music Entertainment Holdings, Inc. All Rights Reserved. International Copyright Secured. 株式会社ヤマミュージックエンタテインメントホールディングス 出版部登録番号20211748P

【エレジー】(P154) ©1980 by Yamaha Music Entertainment Holdings, Inc. All Rights Reserved. International Copyright Secured. 【ホムにて】(P155) ©1977 by Yamaha Music Entertainment Holdings, Inc. All Rights Reserved. International Copyright Secured.